

六年生のみなさん、卒業おめでとうございます。

とうとう、この日がやってきました。

みなさんの入学は2018年。その年の六月、人工衛星「はやぶさ・2」が小惑星リュウグウに到達。大谷翔平選手がメジャーリーグで新人王を獲得、音楽や動画配信などの「サブスクリプション」が本格化したのもこの年からでした。2018年は、今ではすっかり「あたりまえ」になっている様々なことが始まった年といえるでしょう。

みなさんの小学生時代も、四月に始まりました。今日はその日から、1156日目。最初は特別なことだった高洲第三小学校に通うことも、いまではすっかり「あたりまえ」の日常になりました。大きかったランドセルもいつの間にか小さく感じられるようになり、とても広く思えた校庭や、校舎も今では狭く感じることもあるでしょう。

今年度は、三小のリーダーとして、年下の子たちへ優しく声をかけ、励まし、運動会や五十周年記念式典、ありがたいの会では圧巻のパフォーマンスを見せてくれました。「自分たちにもできるかな」と不安に感じていたかもしれませんが、大丈夫でしたね。

今日まで皆さんは「伝説の学年」を目指してきました。伝説とは「その地に根付いて、人々に語り継がれるもの」です。みなさんの活躍は、間違いなく三小のみんなに語り継がれていくでしょう

今、みなさんが六年間を振り返り、胸にいっぱい思い出や感謝の気持ちを抱いているこのとき、少しでも構わないので、心に留めておいてほしいことがあります。

それは、日常を失い、家や家族も失った北陸の六年生たちのこと、今この瞬間にも、命を落とすかもしれない日々を過ごしている、ウクライナ、イスラエルやパレスチナの十二歳の子どものことです。

彼らの気持ちに寄り添うということは「日本で、世界で、自分たちとは違う状況にある同じ年齢の人たちがいるのだ。」ということをお忘れなことです。そうすれば、今日を迎えられることが、「また明日！」と言い合えることが、あたりまえに思えても、どれほど特別で、幸せなことだということがわかるはずですよ。

あたりまえに思えても、特別なことは他にもあります。そのことを話しますので、皆さん、静かに後ろを向いてください。おうちの人は見つかりましたか。しばらくそのまま聞いていてください。

「行ってきます」と家を出て、「ただいま」と家へ帰る。その時あなたが聞いてきた、たくさんの「行ってらっしゃい」、「おかえりなさい」、これらの言葉もまた、あたりまえではありません。なぜなら、その中には「今日も、無事でありますように」「楽しい日でありますように」「良かった、元気に帰ってきた。」「なんだか表情がさえないな。なにかあったのかな」というあなたへの親の想いが込められているからです。

あなたの背が伸びて、できることが増え、少々生意気な口をきくようになって、名前を呼ばれた幼いあなたが、危なっかしい足取りで私たちの胸に飛び込んできたその姿を、私たち親は忘れません。

帰る家がある、愛してくれる親がいる。これもまた、特別なことなのです。前を向きましょう。

保護者の皆様、これから彼らは思春期の只中、大人と子供の間を行ったり来たりします。

「べつに・・・」といっても、本当は不安で

「一人にして」といっても、そばにいてほしい。そんな時期です。

わたしから、保護者の皆さんにお願いがあります。

先回りして教えようとせず、そばで見守ること。

ダメな時こそ、最後まで信じること。このふたつです。

今はできなくとも、彼らは必ずやり遂げます。困難に出会っても、彼らは必ず乗り越えます。ご心配ですか？大丈夫です。私たちの自慢の6年生ですから。

さて、六年生のみなさんへの最後のメッセージです。

スポーツでは、得意なことが違う人たちが集まって、一つのチームになるように、みなさんもまた、63人の得意なことが違う人たちがあつまって「伝説」を作り上げてきたチームです。

千葉市には97万人、日本には1億2千万人、世界には78億人の自分とは違う人たちがいます。これから出会うたくさんの人達と、得意を合わせて、足りないところは補い合って、新時代を切り拓いてください。

一日一日を積み重ね「あなたがなれる最高の人」を目指して生きる。それが人生における成功です。

あなたなら大丈夫。みなさんなら大丈夫。大丈夫です。

令和六年 三月十九日

千葉市立高洲第三小学校

校長 山越正人